



TITLE:

海外日誌(二十八) (京都大學天文臺
新館記念)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 海外日誌(二十八) (京都大學天文臺新館記念). 天界 1925,
5(55): 294-297

ISSUE DATE:

1925-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160268>

RIGHT:

海外日誌 (二十八)

文部省在外研究員 山本 一 清

大正十三年十月三十一日(木)

朝、曇り空を氣遣ひながら、シャントエの丘の上を散歩し、大學理學部の屋上に天文臺のドームを見たが、此所は大した設備を持つてゐない。市内のゐたので、寫眞を一二枚撮つたに止めて、訪問をせず。むしろ、市内の見物に時を費した。瑞西國政廳や國會議院幾つかの公園、變な廊下附きの賑やかな街路など面白かつたが、名物としては、やはり、ニデク橋畔の熊の穴さ、クラム街にある幾つかの噴泉さ、由緒深い時計鐘であつた。時計鐘は恰も十二時の報時を見たが、熊や小鳥や鐘つきの人形なども、出たり入つたりする有様は、いかにも念の入つたものだ。と思はせる。——勿論、作つた最初の意味は、單なる余興以外に、今少し眞面目なものであつたらうと思ふが。

午後二時半ベルン發。五時、チウリヒに歸着して、これで回覽旅行を終へ、少憩、カフェー一ぱいの後、六時更にチウリヒを發して、七時半バーゼル着。ホテル・コンチネンタルに入る。

バーゼル遊星發見の報を新聞で知る。又、英國總選舉の第一報、保守黨大勝のこゝを新聞でよむ。

十月三十一日(金)

朝、雨を冒して、ミユンスタール寺を見、其の北側の臺地に立つて、始めてラインの流れを見た。連日の雨で水は濁つてゐる。——それから大學のベルヌーリ館にニータムマー教授と其の天文臺を訪ふた。天文臺としては七時の赤道儀が一つさ、ほか古い天球儀や圖書があるに過ぎないが、ニータムマー臺長はマドリッド以來の馴染であり、話して見ると、「將來は光電光度計で變光星を研究するつもりです」などと云つてゐられた。「二三日前に、あなたの大學の松山教授も來られまして……」なども言はれた。

午後二時、バーゼルの端西停車場發。バーデン停車場で獨逸入りの

四〇

ため諸検査があつて、三時發車。——急に、ストラスブール行きを思ひ立ち、アベンライヤーで乗り換へ、國境のケール驛でまごついて、ラインの鐵橋を、獨から佛へ、佛から獨へ、幾度か徒ちわたりした後汽車を捕へて、目的のストラスブールに着いたのは七時過ぎであつた十一月一日(土)

少々旅行用品の買ひ物をするのが、ストラスブールへ立寄つて來た目的の一つであつたのに、來て見て、今朝氣がついたことは、今日が總聖者の日の祭りで、店々は皆閉ぢられてゐる。——致し方なく市街をあきまはり、クレール廣場やグーテンベルグ廣場を經、ミユンスタールで今日の祭りの式を見、城の廣場から大學通りに出た。京都大學の村岡教授が昔此の大學で學ばれたことがあるのを思ひ出す。

十時頃、大學天文臺を訪れたが、臺長エスクランゴン氏は不在、一助手に案内されて、諸設備を見る。十四時のメルツ・レブソルド赤道儀は、近頃、ドームの運轉や觀測椅子にも皆電力を用ゐるやうに改められ、又、五時の子午環は接眼部に大改良を加へたりして、戦後フランスのものになつた此の天文臺は鋭意近い將來の活躍を豫期してゐる。

お晝にかたつむり料理を始めて食べたが、英子は大變御氣に召したらしいけれど自分は眞つ平——。

十一月二日(日)

朝八時ストラスブール發。又、獨逸入り。ケールで税關検査、アベンライヤーで乗り換へ、北行。窓外は雨。

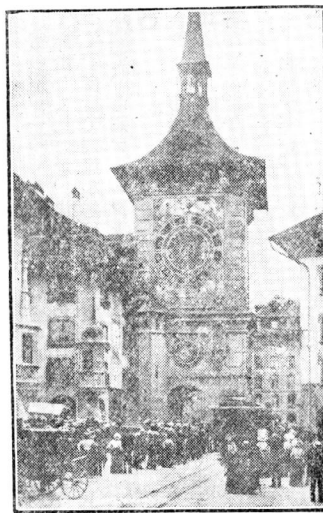
別に用事もないのだが、十一時カールスルーへに下車して見た。停車場の位置がベテカー書の記事と違つてゐるため、少々まごつき、電車で市中に出、城の廣場の雨の景を見た。——二時發、三時ハイデルヒに着き、ハイデルベルガー・ホフさといふ宿屋に入る。

獨逸の有名な大學町として、特に自分には當國隨一の天文臺の所在地として長く憶れてゐたハイデルベルヒに來たさといふことは、嬉しくもあるが、それだけ、天氣の惡ろいのが情なかつた。有名なネカー川も見たいものだと、宿を出て、新橋のほとりを散歩して見たが、連日

の大雨で川は大水に濁り、霧で遠望もきかず、城の上、ケニグストウルの山全體は雲で掩はれてゐる。それに——こんな町でさへ、ドイツ人たちの無作法さに驚かされた。

十月三日(月)

朝十時、コルン・マルクトから登山鐵道で天文臺のあるケニグストウルの山に登る。憎々しく雨は降りしきる。漸く、森の中に天文臺を見つけて入つて見れば、フロスト、シヤブレイ兩氏の紹介狀を持つて來たのに拘らず、臺長マクス・ナルフ教授は下山中で不在といふ慘々な不運である。止むを得ず、ミュンドラー氏の案内で、本館や大小望遠鏡室を見せられた。十



鐘計時ンルベ

六時のブルース寫眞鏡や、二十七時のザルツ反射鏡や、六時半レプソルド子午環や、十二時クレスマン赤道儀など、何れも學界に功名嚇々たる器械であるが、自分は此の天文臺の設備については多少の豫備知識があつたので、格別、新しい印象は無かつた。何よりも臺長に會へなかつたのが残念で、ミュンドラー氏は其れを切りに氣の毒がつてくれたが、此の天文臺には遠からざる内に再び訪れることがあると思つて此の日は下山した。

午後三時發。五時フランクフルトに着。——雨は止まない。

十一月四日(火)

晴れた空に元氣付けられて、朝からカイザー街、シラー廣場、ゲーテ廣場、オペラ館あたりを歩いた後、ヒルシ・グラーパーベンのゲーテの

家や、舊市街、ドームなども一通りは見た。午後は三時から大學へ行き、物理館の一角に聳える天文臺を訪問。ボダ氏に迎へられ、研究室や、子午室や、八時赤道儀を見た。

昨日までの豪雨は、此の地方到る所に洪水を齎して、新聞は多くの被害を報じてゐる。フランクフルトの低い街々はメイン河の水に荒されてゐる。

十一月五日(水)

朝九時半フランクフルトを發し、ゴルドン・タインを経て、十一時マインツに來て見れば、フランス軍の占領地帯で、貨幣はフランス物、時刻もフランス時間が用ゐられ、言葉はフランス語、汽車もフランス式外來者は旅券の検査……しかも市街に出て見れば、戒嚴令下の市民全體が、やはりドイツの貨幣さ、ドイツ時間さがドイツ語によつて用ゐられてゐるといふ複雑さ!!——此の二重生活の余波を受けて、吾々は「無切符乗車」といふ名の下に停車場で罰金二十フランづゝを徴せられた!!

午後、旅行事務をかね、電車でフリースパーテンへ行き、クーパーハウスや城のあたりを見物した。

十一月六日(木)

朝七時過ぎ(フランス時)マインツ發、左岸の鐵道によつてライン河を下る。天氣は好い。——兩岸の用事もあつて、八時半ビンゲンといふ川舎町に下車し、買物したり、城跡に登つたりしたが、数日來の不愉快つゞきにひきかへ、此の町の人も景色も非常に吾々の心を喜ばせた。

十一時ビンゲン發、人の込まない車室を自由にしながら、ラインの美景を眺めつゝ北へ走る。河の兩岸に、又、河の中島に、つゞいて送迎する多くの古城趾は、全く、歐洲中世の繪巻を見る心地して、かうした歴史の好きな自分の心を踊らせた。十一時半、かの歌をうたひつゝ、ローレライの岩角を通過、一時にはコブレンツを経、二時半には七つ山の嶺々を望む。

三時ボンに下車。日のある内にさ、早速、有名な此の大學天文臺を

訪問。幸ひ、臺長キュストナー教授に迎へられ、案内されて十五時寫眞望遠鏡其の他を見た。此所は昔アルゲランデルがボン星表を作つた天文臺なので、特に頼んで其れに使用された三時の（今ならばおもちや見たいな）望遠鏡を見せて貰ひ、尙、其の昔しの觀測帳も見せて貰つた。自分は臺長に「あなたが緯度變化を發見せられた時の天頂望遠鏡は？」とさきさき、「ベルリンにあります」との返事であつた。

天文臺を見て遅、日没までには、大急ぎ、ペートーゼンの家へ馳けつけたが、時既に遅かつたのは残念であつた。

夕食後、六時ボン發。半時間後にケルンに着いた。ところが、此所は英國軍隊の占領地帯で、多くのホテルが徵發されてゐるため、ドーム附近に今夜は宿の室が一つもあいてゐないとの事。——之れには大閉口。いろ／＼奔走して見たが、決局駄目とわかり、氣を腐らせて、急に、思ひ切つて、夜行で獨逸を逃げ出すと定めた。汽車は十一時半發。ア、ヘンを経て、白國ブルユツセルへ。

十一月七日(金)

朝六時ブルユツセル市の北停車場着。テルミヌス・ホテルに入る。英子が宿で眠つてゐる間に、自分は附近の街路を、ブルス邊まで歩きまはつて、案内書を買ふ。午後からは兩人でフルケール廣場、ブルス廣場、大廣場、サン・ジャン廣場、王宮廣場、公園等を散歩し、植物園を見て歸宿。——北風が寒い。

十一月八日(土)

朝十一時、かれてダンビー氏に教はつて置いた通りの電車で、市の南部のユクルに王立天文臺を訪問、副臺長ストルーバン氏に面會。のち、二人の助手に交る。案内されて、六時子午環、十五時赤道儀、十三時寫眞鏡などを見、又、地下室では珍らしい月球模型を見た——西洋の學者には時々かうしたものを作る機智と余裕がある。

午後は電車でワートルローの古戰場へ行き、ライオン塔に登つたりミウゼを見たり、パラマを覗いたりして、百年前の大戦を偲ぶ——夕方、ブルユツセルに歸つて、宿の近くの活動寫眞館で「ナポレオン」さいふ畫を見たのは、興味が深かつた。

十一月九日(日)

朝食後、獨りさび出して、植物園の向ふに、舊天文臺の跡を見た。建物は大量元の形を残し、子午線室など屋根の形で明らかに認められるが、今は建物全部は農務省となつてゐる。

午後一時、南停車場より急行列車でパリに向ふ。二時半國境通過、四時頃、サン・カンタン驛の内外に慘嘆たる戦争跡を見る。——途中から汽車は大に遅れ、七時漸くパリ着。ホテル・アンテルナシオナルに入る。——これで西歐の巡回旅行を終へたわけ。

十一月十日(月)

午前中は旅行の残務整理のため、大使館へ行つたり、クックへ行つたり。

午後三時、川端のフランス學院内の理學アカデミー例會の傍聴に出かけた。ビグーダン氏とラ・クロワ氏共にマドリドで會つたことのある）さが座長席で裁配を振つてゐた。——室内の構へさといひ、集まつた學者たちの態度さといひ、さすがに三百年の歴史を持つた學府の威嚴と權威さを表はしてゐた。

十一月十一日(火)

六年前の歐洲大戰休戦記念日で、今日はパリも大祭日、エトワルの廣場では大仕掛けな軍國的儀式が催される。自分等も十時頃からシャンゼリゼーの口に立つて之れを見た。——午後はルーヴルからチュイレリーの園あたりを散歩したが、こゝでも色んな示威運動が行はれてゐた。

夕方、宿で小室、松山兩氏に會ふ。

十一月十二日(水)

ベルギー旅行中は可なり寒かつたのに、パリへ歸つて見れば案外に暖かいので喜んだものの、もはや冬も近いわけであるから、今日はリヂリ街へ行つて、外套を一着づゝ買ふ。

來週の英國旅行は、自分獨り行くさし、英子は居残つて、パリを出るだけ研究することとする。

十一月十三日(木)

朝ラクロワ氏を博物館に訪れるつもりであつたが、時間が遅れて了つたので、中止。アラゴ通りを歩いて天文臺を訪れ臺長に面會の機を頼んで置いて歸つた。

午後はルーヴル博物館のギリシヤ彫刻を見る——有名なミロのヴィナスなど。

十一月十四日(金)

午後三時、獨りで天文臺を訪ひ、臺長、パヨール氏に面會、息(丁)パヨール氏の案内で本館の社交室や展覽室、又、別館の十三時寫眞鏡や、子午環室など、主なものを見る。さすがに廣くて、大きくて、短時間には見盡せない。今日は一部に止め、夕方、一助手に伴はれて、アラゴ通りのプラン會社を訪ふた、此の會社は昔しのゴーチエ會社を繼いだ有名な天文器械製造會社で、今日見たものの中にも日本から注文の子午儀四つと子午環一臺とが殆んど完成に近づいてゐた。

十一月十五日(土)

寒い。

朝の間、英國旅券局へ行つたり、日本の大使館へ行つたり。午後はイタリヤ街へ買ひ物に行く。

十一月十六日(日)

英子に見送られて、朝十時サン・ラザール停車場を英國行特別列車で出發。午後一時アエブ着、直ちに連絡船に乗り移り、まもなく出帆。可なり揺られつゝ、五時ニウ・ヘザン港着。一通りの旅券と税關検査を終へ、南部鐵道により、六時半ロンドンの拜イクトリア停車場着。近くのベルグラリア・ホテルに入る。

十一月十七日(月)

さにかくロンドンの街々を見ればなるまいと、かたて讀んで置いた案内書の知識をたより、朝食後、パキング宮殿、議院スクエア、拜クトリア堤、ノーザンバ街、チャリング・クロス、トラファルガー・スクエア、ストランド、フリート街、聖ポール寺、イングラランド銀行の順に一巡して、序でに横濱正金銀行や、日本郵船會社へも寄つて、用事をすまし、それからロンドン橋をわたり、トウレー街から電車でグ

リンキチ公園に行く。

公園の中のグリーンキチ天文臺に着いたのは三時少し前。直ちに臺長ダイソン博士に會ひ、暫く話した後、昨夏ダートマス大會の折既に見覚えあるジャクソン氏に案内されて、二十六時寫眞鏡や、二十八時赤道儀や、八時大子午環や、八時寫眞天頂管や、それから立派な社交室なども見た。日食寫眞を幾板か、殊にアインシュタイン問題を最初に觀測した寫眞原板も見せられた。かねて聞き知つて想像はしてゐたが、二十八時の處待のされ方、大子午環の古びた目盛りなどは驚いた。あたらし此の有名な天文臺の肝腎な設備を、徒らに英國氣質で保存にのみ力めず、むしろ思ひ切つて改良しなくてはなるまい。(名簿によると、此の天文臺に日本人訪問者の數多いこと!! 自分は今日取り次ぎを待つ間に數へて見た所によると、十月始めから今日までに五十八人あつた——それが何れも日本の天文臺をさへ全く知らないらしい素人ばかり。)

聞いたにまさるロンドンの霧にも驚いた。どうも之れは或る程度まで人工的なものと思はれるのだが……。

たより

教室で教はつたことは、記憶すべからざるもの、如く、そのまゝ學校に置いて來ましたのに、星に對つての面白さのみは、どうしてか、いつまでも胸に生きて居ます。西南の空に大きい光度のを見つけてました。早速、星座表を探して見ますが、見當りません。ハテま考へれば、あゝあれは遊星と氣が付きました。ほんさうに大きい美しい星です。世を忘れ、塵を忘れ、人をさへ忘れて星の研究を御重ねになつて居る方々が思はれます。(TU)